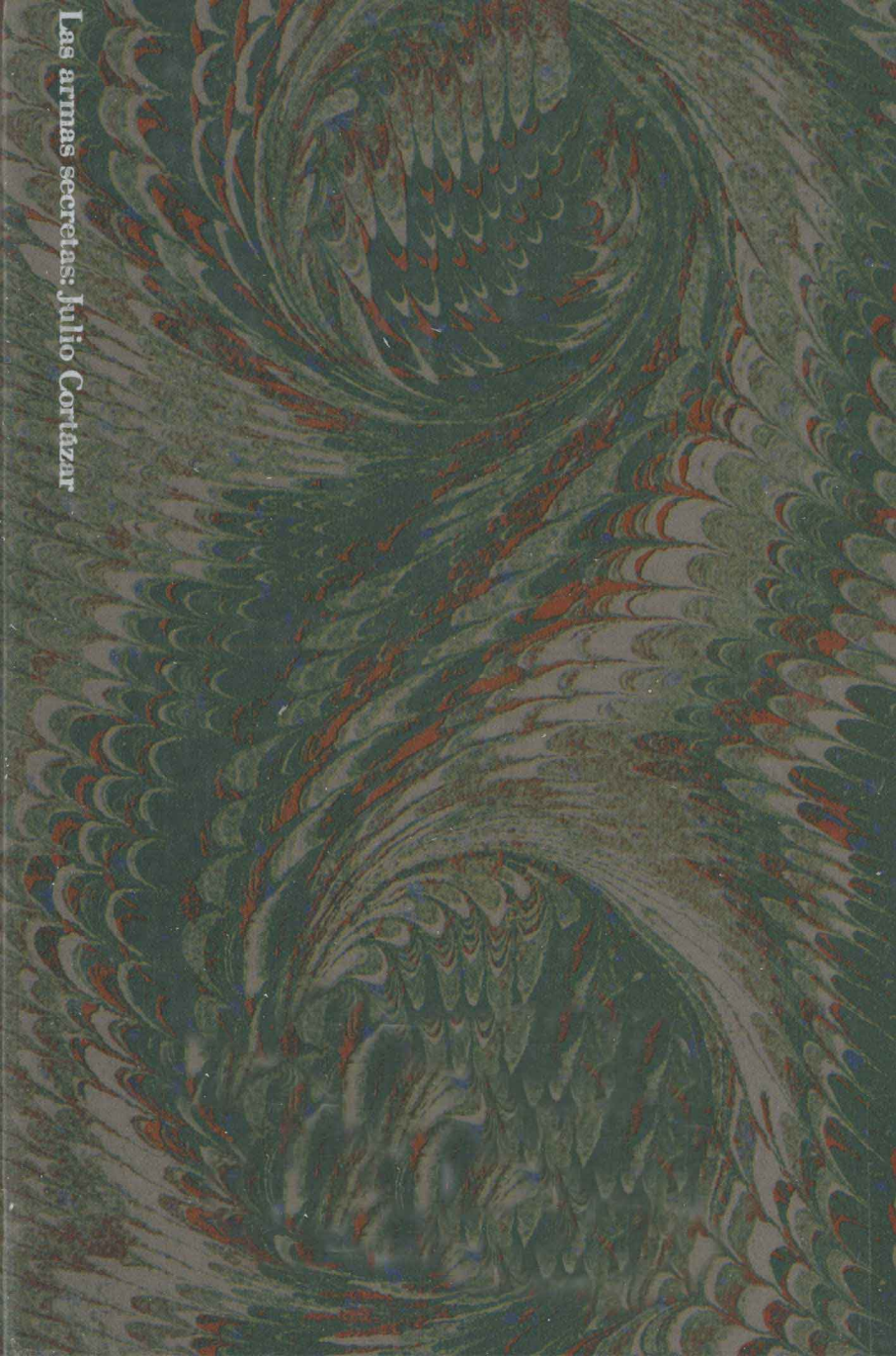


Las armas secretas: Julio Cortázar



紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系 30



秘密の武器—ニルタサル

Las armas secretas, Julio Cortázar

木村繁一 訳

国書刊行

秘密の武器

昭和五六年六月一〇日印刷 昭和五六年六月一五日初版第一刷発行

著者—フリオ・コルタサル

訳者—木村榮一

発行者—佐藤今朝夫 発行所—株式会社国書刊行会

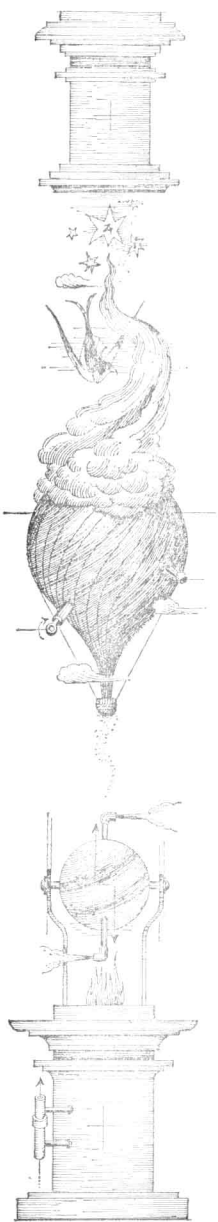
東京都豊島区巣鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京五—六五二〇九

造本—杉浦康平+鈴木一誌 本文挿画—渡辺富士雄

印刷—セイユウ写真印刷株式会社 製本—大口製本印刷株式会社

定価—二、二〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします



木村榮一 きむらえいいち

一九四三年、大阪生れ。

神戸市外国語大学イスパニア

学科卒業。

現在、神戸市外国語大学助教授。

専攻、ラテンアメリカ文学。

主要訳書—

コルタサル『遊戯の終り』

国書刊行会、一九七七年。

ボルヘス『フェノスアイレスの

熱狂』（共訳）大和書房、

一九七七年。

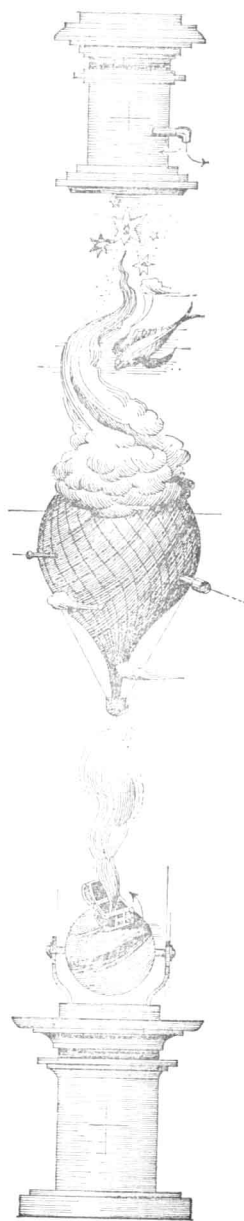
フエンテス『聖域』国書刊行会、

一九七八年。

サルドワイ『歌手たちはどこから』

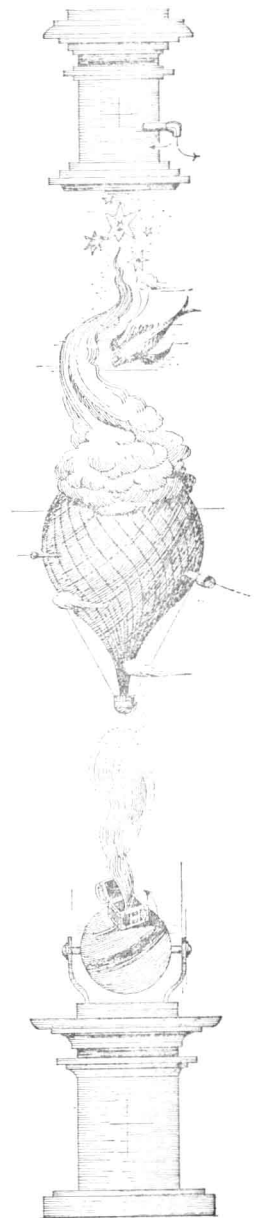
国書刊行会、一九七九年。





秘密の武器
J・コルタサル——木村榮一 訳





目次

7 ——— 秘密の武器 J・コルタサル

9 ——— 母の手紙

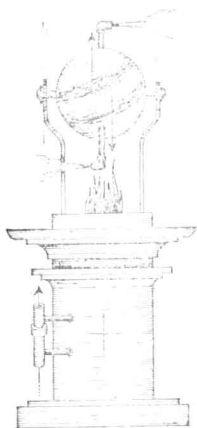
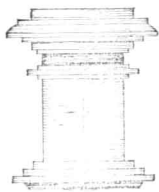
43 ——— 女中勤め

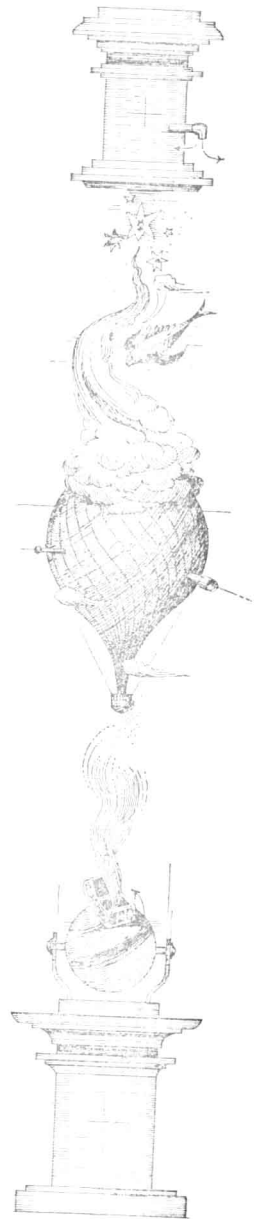
89 ——— 悪魔の涎

109 ——— 追い求める男

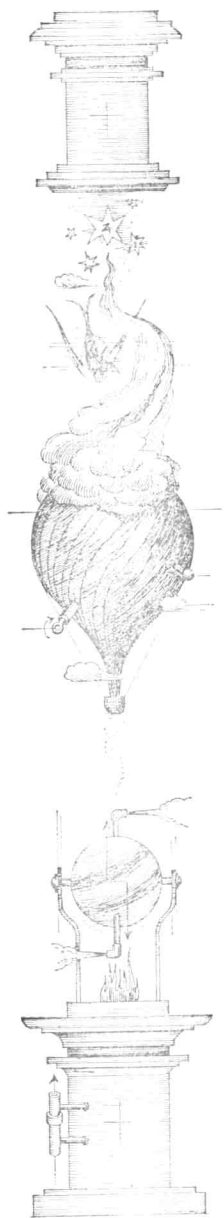
199 ——— 秘密の武器

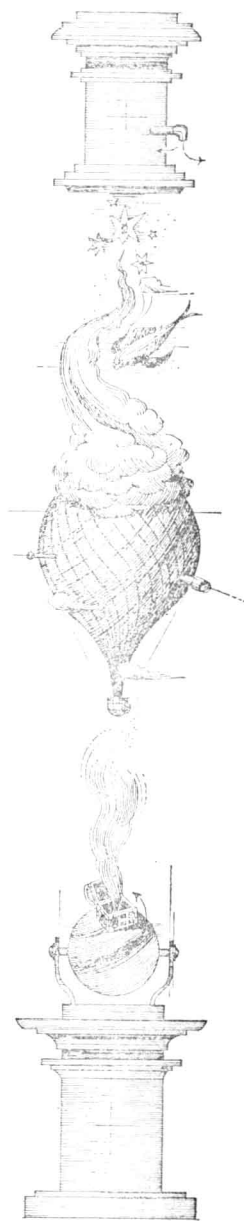
243 ——— コルタサルと「秘密の武器」——— 木村榮一





秘密の武器

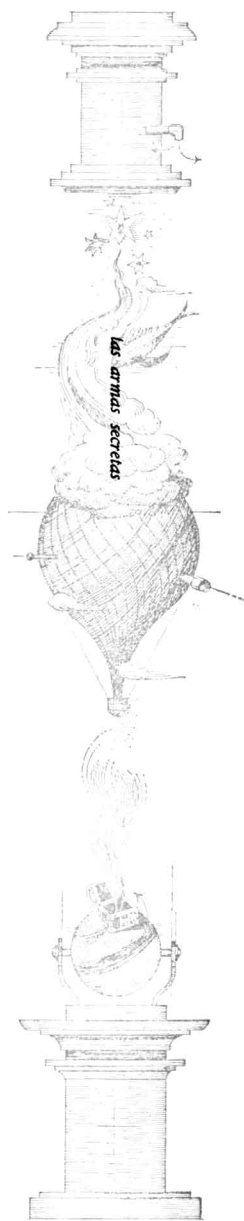




母の手紙



仮釈放というのはちょうどこういう状態を言うのだろう。門番の女から封筒を受けとり、ホセ・デ・サン・マルティンの小さな顔をちらっと見ただけで、ルイスはたちまち、ああ、また橋を渡らなければならぬのかと考えた。サン・マルティン、リバダビア。このふたつはいずれも人名だが、同時に街路やいろいろな事物を思い起こさせた。リバダビア街六千五百番地、そこにはだだっ広いフロレスの屋敷があり、母が住んでいる。また、サン・マルティン街とコリエンテス街にあるカフェではよく友達と待ち合わせをしたのだが、あの店のラム酒をアイス・コーヒーで割ったマサグランはどういうわけかかすかにゴマ油の味がした。「どうもありがとう、デュラン夫人」と言つて封筒を持つて一歩外に出たとたん、その日一日が前の日とは、いやそれまでとはすっかり違つた一日になつたように感じられた。このようならばかばかしい問題が起こる以前からそうだったが、とにかく母から手紙が届くたびに、ルイスの生活は一変し、壁にゴムまりを思いきり叩きつけたように否応なく過去の世界へと引き戻されるのだった。彼はちょうど手紙を読みおえたところだが、どうも納得がいかない、腹立たしいとも当惑したともつかない気持ちでもう一度バスに乗つてから読み返してみた。母の手紙はいつも彼の時間を変質させてしまう。ルイスはやつとこのことでラウラを自分の生活の中に引き込み、バリをもうまく生活の中に組み込んだ。考えに考え、細心の注意を払つてようやく思い通りの秩序を作り上げたというのに、母の手紙はいつもそんな彼の生活にかすかなざざ波を立てるのだ。手紙を受け取るたびにしばらくの間は妙な気持ちに捉えられるが、急いで愛情のこもつた返事をしたためると即座に母の手紙を破り棄てることにしていた。何といえばいいか、やつと



思いで手に入れた自由、人が人生と呼んでいる毛織物に荒々しくハサミを入れて切りとった自分の新生活が、母の手紙が届くたびに急に後ろめたいものに思えて、バスでリュリュー街を走っている時に見える街路の突き当りのようにぼんやりぼやけた実体のないものに思えはじめるのだ。そして、自分はばかばかしいことに保釈中の身なのだ、主文から切り離され、括弧にくくられた単語みたいな奇妙な生活を送っているにすぎない、そう考えてつい自嘲的になってしまう。気が滅入り、慌てて返事を書くが、それは開けたドアを反射的に閉めるようなものだった。

その日の朝もいつも手紙が届く日ととり立てて変わったところはなかった。ラウラとは昔のことをあまり話さなかったし、フロレスの屋敷のことは努めて話さないようにしていた。だからといって、ルイスがブエノス・アイレスのことを思い出したくないと思っていたわけではない。彼はある人の名前が話題に上るのを恐れていたのだ(当人はとっくの昔にこの世から姿を消しているのに、その名前のほうは亡霊のようにいつまでも執拗に生き続けていた)。ある日、彼は思いきってラウラにこう言ってみた。「手紙の下書きか本原稿みたいに過去を破り棄てることができないうものかな。だけど、過去ってやつはいつまでも消えないで、きれいに印刷した本の上に影をおとしているんだ。本当の未来というのには案外そんなものかも知れないね」じつのところ、ブエノス・アイレスには家族が住んでいるし、向こうの友人たちも時々思い出したように絵葉書きに愛情のこもった言葉を書いて送ってきたり、詩人氣取りの御婦人方がどこかで読んだ憶えのある下らない詩を投稿にしている(ナンソン紙の文芸附録を送ってくれたりした。

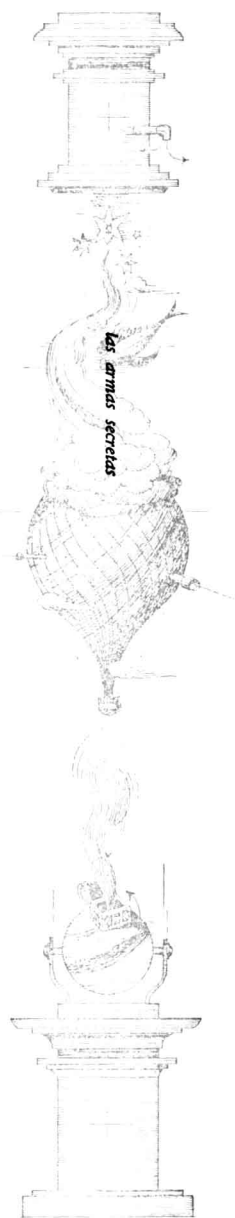


そこには時々、内閣解散の危機、謀大佐激昂すとか、無敗のボクサーを取り上げた記事などが載っていた。だから、二人でプエノス・アイレスのことを話し合っても少しも不思議ではなかった。どうしてラウラと向こうのことを話題にしなかったのだろうか。彼女もやはり昔のことを思い出したくなかったのだ。ただ、二人で話している時とか、とくに母の手紙が届いたりすると、ふと思いついたように人の名前やあるイメージを口にするが、それも今では通用しなくなった貨幣とか、遠い川岸にある死の町の遺物のような感じで消えて行った。

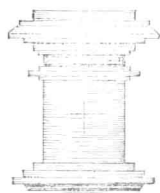
「それにしても暑いな」と彼の前に座っていた労働者がぼつりと言った。

「この男はほんとうの暑さがどんなものか知らないんだ」とルイスは心の中で思った。「二月の暑い午後、マヨ並木道カリニエールのせまい路地を歩いてみると肌で分かるんだがな」

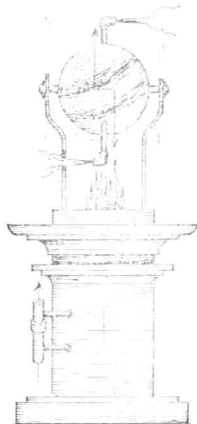
彼はやりきれない思いで封筒から手紙を抜き出した。読みやすい字体で書かれた手紙が目前にあった。あたり前の話だが、たしかにそれは目の前にあった。最初に読んだ時は後頭部を殴られたようなショックを受けたが、すぐに気を取り直して、防御に廻ることにした。ラウラにはこの手紙を見せないほうがいいだろう。母は、ピクトルと書くべきところをニーコと書き違えていた。取るに足らないといえよそれまでだが、こんなふう間違えているのに気づいたらラウラはたぶん傷つくだろう。それだけはなんとしても避けたかった。人からもらった手紙はよくどこかへ行ってしまおうが、この手紙も海の底に沈んでくれればいい。事務所に着

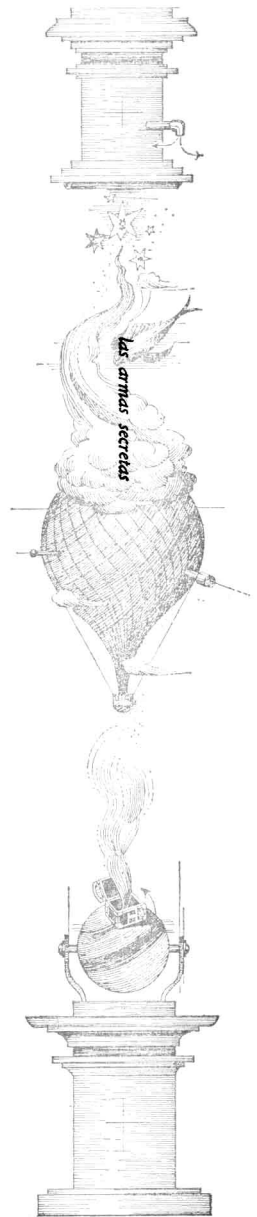


いたら、トイレに流してしまおう。二、三日するとラウラはきつと訝しそうに言うだろう。「どうしたのかしら、お母様から手紙が来なかったわね」小さい頃に母親を亡くしたせいだろうか、彼女はけっしておかあさんとは言わなかった。それを聞いて彼は答えるだろう。「ほんとだ、おかしいな。じゃあ、ぼくから手紙を書いておくよ」そう答えたあと、どうして手紙をくれないのですかと母に手紙を書くだろう。それだけしておけば、あとは安心して勤めに出、夜は映画に行ける。ラウラも落ち着いて、いつものようにやさしくなぐれと世話を焼いてくれるだろう。しかし、レンヌ街でバスを降りた時、ふとこう自問した(自問というほどでもないが、他に言いようがないのだ)。いつそラウラに母の手紙を見せてやったらどうだろう。それは彼女のためを思ってたか、彼女がどう考えるだろうかということとは関係がなかった。彼女のことだから、手紙を読んで動揺しても取られまいとするだろう。いずれにしても、彼女がどう思おうが彼にはどうでもよかった(感情をあまり表に現わさない彼女が、心の中でどう思おうがほんとうにどうでもよかったのだろうか?)。じつのところそんなことはどうでもよかった(ほんとうにどうでもよかったのだろうか?)。しかし、まず第一に大切なことは、ということとは、第二、第三番目のものもあるということになるが――。取りあえずいま気にかかるのは、手紙を読んでラウラがどんな顔をし、どんな態度をとるかということだった。もちろん、彼としてはそのことが知りたかったし、ラウラが母の手紙を読んでどんな風に反応するかを見たかったのだ。手紙を読んでいて、ふとニーコの名に目を留めるだろう。すると、急にラウラの顎がこまかく震え始めちよつと間をおいてこう言うに違いない。「変ね……お母様はど



母の手紙





うしてこんな間違いをされたのかしら？」ラウラは泣くまいとするだろう、ニーコと言いかけた口もとをゆがめ、両手に顔を埋めてわっと泣き出したいのを必死になってこらえるだろう。その様子がありありと目に浮んだ。

広告代理店でグラフィック・デザイナーをしてる彼は事務所に着くと、もう一度手紙を読み返してみた。名前を書き違えているところが気にかかったが、他はこれまでの手紙と同じでどこといって妙なところはなかった。このニーコという名前を消して、ピクトルと書き換えればいいんだ。母が間違えたのを訂正するんだから何も問題はないはずだ。そしてこれを家にもって帰ってラウラに読ませてやればいい、そう彼は考えた。母の手紙はいつも彼に宛てて書かれていて、それは文面からも容易に察せられるのだが、ラウラはべつに気にする様子もなくいつも興味深そうに読んでいた。母はいつも彼に向かって書いて、ラウラのこととは手紙の末尾が真中あたりで、彼女によるしくという一文が挿入してあるだけだった。しかし、ラウラは気にもせず、楽しそうに読んでいた。母は持病のリウマチがあり、目が近かったのでところどころ文字が奇妙な具合にねじれていたが、そんな箇所にくると、ラウラは首をひねって考え込んだ。『お医者さんはサルチル酸塩を少しくれたんだけど、わたしはサリドンを飲んでるの……』母の手紙はいつも二、三日の間、仕事机の上に投げ出してあった。ルイスとしては、返事を書いたらすぐにも投げ棄てたかったのだが、ラウラがまた読み返すからといって棄てさせなかったのだ。女性というのは手紙を何度も読み返して、ためつすがめつする